



第301号 ・2021年02月15日発信

覚馬とゆく(5)

——覚馬と襄を同志にした2冊——

大島中^{ちゅうせい}正先生（同志社女子大学表象文化学部教授）

・4月5日

4月5日は、同志社にとって記念すべき日です。新島襄がはじめて京都の土をふんだ日だからです。1875年4月5日月曜日、比叡山をへて、正午に三条にある旅館目貫屋に到着し、その日の夕方「木屋町三条上ル12」に宿泊中の、アメリカン・ボードの同僚宣教師M・Lゴードン（1843—1900）をおとずれました。おそらくその数日後でしょうか。襄と覚馬がめぐりあうこととなります。

余談を一つ。4月5日はわたくしにとっても記念日です。同志社大学の学生になった日だからです。1977年4月5日の正午であったかとおもいます。パイプオルガンの前奏から礼拝形式の入学式が始まりました。それまでキリスト教とは無縁であったわたくしは、かるいショックをおぼえました。会場は栄光館ファウラーチャペル。当時大学長であった松山義則先生は、「この同志社で4年間、友人と古典からまなんでください。」という趣旨のことばで式辞をしめくられました。式後、「古典というのは聖書のことかな。それとも、古今東西の名著のことだろうか。師といわず、友人とおっしゃったのは、どういうことだろうか。師も友人のうちということだろうか。」こんなふうになんか心の中でつぶやいていました。44年の歳月をへた今日でもわすれることができない、松山先生の新入生へのメッセージです。わたくしは、同志社大学に入学してから今日まで、おおくの師・学生・友人・同僚・先輩・後輩にめぐりあい、その人たちからさまざまなことをまなんできました。また、よむたびに刺戟をあたえられる、わたくしの「古典」もできつつあります。しあわせなことです。

人間は、この世で邂逅した友人たち、あるいは、すぐれた作品の作者から生涯まなびつづけるものでありましょう。『百一新論』と『天道溯原』。この2冊が覚馬と襄を同志にしたのだといっても過言ではないように、わたくしにはおもえます。

・西周著『百一新論』

『百一新論』は、西周(あまね)(1829-1897)の講義録です。「哲学」という翻訳語の初出はこの書物であるといわれています。西周は、1867年に僑居の更(きょう)雀寺(しゃくじ)(四条大宮西入)に開設した洋学塾で連続講義おこないました。『百一新論』は、その連続講義に列席していた覚馬がみずから序文をしたためて出版(1874年)したものです。この本は、簡単にいってしまえば、百周の「教」も一つであることを哲学するもので、「法」と「教」とがキーワードだといっただけでよいとおもいます。まず「法」によって人の行動の大枠をととのえ天下国家をおさめる。そののち、「教」によって人心を善美な領域へとすすませる。このようなことが比喩をもちつつ問答体でのべられています。

覚馬は、西周の連続講義「百一新論」によってキリスト教・仏教・儒教等のさまざまな「教」を相対的にとらえる心眼をもつようになっていたのではないのでしょうか。襄が『百一新論』についてどのような評価をあたえていたのか。現在は不明といっただけでよからうとおもいます。覚馬とはことなる見解をもっていたかもしれません。

・ゴードンから入手した『天道溯原』

覚馬をキリスト教に開眼した書といわれている『天道溯原』は、長老派ミッションから中国(寧波、北京)へ派遣された宣教師のW・A・Pマーティンが漢文であらわしたキリスト教入門書です。これも簡単にいってしまえば、神が万物の創造主であることを、具体例をあげ比喩を駆使しつつ、ときあかさかとしているものです。その冒頭には、「天主乃ち神は形體の見るべき無し。而してその妙用は又顕はれて見るに易し。」とあります。「神の姿は人間の目にはみえない。しかし、その人知をこえた不可思議なはたらきは人間の目にも容易にみえる。」とでも現代語訳できるのでしょうか。

わたくしは、『天道溯原』をよんでいて、連想する漢詩の1句があります。それは唐木順三の「おしれという感情」という論説文にも引用されている寒山詩の1句「無源の水を尋究すれば、源窮まりて水窮まらず。」です。人知によって「源を窮める」ことは困難ではあっても可能。しかし、水は窮まらない。漢学の素養のないわたくしでさえも、禅僧による漢詩の力を、それも間接的に、かりることで『天道溯原』がすこしは理解できそうな気がしてくるのです。まして、覚馬や襄のような当時の知識人であれば、『天道溯原』の表現形態・表現内容ともに、容易にしかもふかく理解できたことであらうでしょう。長年月をかけてつちかわれた漢学の素養。それがキリスト教理解のささえになったということです。

・覚馬と襄と

1875年春。西京復興プロジェクトの渦中にある覚馬の前に襄があらわれ、約4か月後に結社し、さらに約3か月後の11月29日曜日に官許同志社英学校が呱呱の声をあげることになりました。

英学校創設の準備の日々、覚馬と襄は、それぞれの経験をかたりあい、議論をたたかわせる時間をたのしんでいたのでしょうか。二人の胸中には、明日の日本、明日の世界について、どんなプランがねられつつあったのでしょうか。地球時代にある現代、同志社はどうあるべきだと二人はおもっているのでしょうか。

わたくしも、非力をかえりみず、同志社ファンのみなさまとともに、これらの問いへの「納得解」をもとめる旅をつづけたいとおもいます。つたないエッセイをご笑覧くださり、ありがとうございます。『管見』をはじめとする、先達たちがのこされた有形・無形の遺産を、「温故知新」のための財として活用できるよう精進したい。そんな覚悟をあらたにしています。■

<参考情報>

・明治7年3月に山本覚馬が出版した西周著『百一新論』。巻之上は、国立国会図書館デジタルコレクションにあります。 → <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/753010>

・覚馬の序文付きの『百一新論』は、松本健一『山本覚馬 付・西周『百一新論』(中公文庫2013)で見ることができます。*Amazonで中古も。

・『天道溯原』は、近代書誌・近代画像データベース-国文学研究資料館にあります。
http://dbrec.nijl.ac.jp/BADB_NIJL-04874